

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4579

II ウマ名人の転機

第十一日め（三月二十六日）

あたたかい朝をむかえた。宿营地では、いつものような作業がはじまる。いつもとおなじことのなかに、いつもとちがうことが、いつも、すこしずつでてくる。

きょうのいつもとすこしちがうこと。メスウシを朝搾乳しないでフレーから放牧にだしたこと。群れを出発させるときに出産しそうなヤギをヘレムにいったこと。朝の哺乳補助のとき、子ヤギのお尻がうんこでふさがっていたのでとってやってお尻に砂をかけたこと。子ヤギをのこしてそのほかの母子たちを井戸につれていったこと。子ウシに水をやったこと。

どれも特別なことではないが、毎日かならずおこなわれることでもない。これからあたたかくなれば、水やりはふえるだろう。とくに授乳期のヒツジ・ヤギは水をたくさん飲むらしい。このところ、ヘレムにずっととじこめていた。バケツで水をやったにすぎない。こんな方法では益がない、という。それで母子群を編成し、井戸におもむいたというわけ。ただし、子ヤギはあいかわらずヘレムにのこる。子ヒツジと異なり、母のあとにつきしたがわらないので、母子群にくわえてもらえない。子ヤギは、小広場にのこされた。

この日、母子群の放牧にあたったのは、分家の嫁サラントヤー。午後零時半。出発前に頭数をかぞえ

た。サラントヤーは八とかぞえた。子ヒツジだけをかぞえたのである。たしかに、うしないやすいのは子だから、子をしっかりとぞえておけばよい。子ヤギはつれていかないから、子ヒツジだけでよい。八匹の子ヒツジに、五頭の母ヒツジと四頭の母ヤギをつれて、井戸へむかう。井戸ではそばにある桶に水をくみ、しばらく自由に飲ませる。それから、ゆっくり宿営地へ追う。ヘレムのそばまでもどると、そのままにする。ヘレムのなかに収容したのは、午後四時。

母子群は「ホルガタイ」あるいは「ヘデンホニ」とよばれている。それぞれ直訳すると「子ヒツジ付き」、「いくつかのヒツジ」という意味である。どちらも、群れ本隊とのちがいを明示する表現になっている。前者は子がいるということ、後者は数がすくないということ、本隊との差を表現する。ヤギとよばれないのは、そもそもヒツジを主体とする群れにヤギが混入されている群れであるからにほかならない。しかも、子ヤギはつれていけない。

もっと数がふえてくれば、もはやかぞえないという。数ではなく、組合せで理解する。どの母にどの子という組合せを記憶し、過不足を点検することになる。いまは少数だから、かぞえればことたりる。多数になれば、容易にかぞえられない。

弟のウネルバヤンが義母のために再出発したのも、すこしいつもとちがう。きのう草原で修理したトラックターは南家まで移動させてある。そこから義母をのせて、自宅までおくりとどける。

兄のウルジーチンゲルが一日中家のまわりで仕事をしていたのも、いつもとずいぶんちがう。井戸からもどった妻サラントヤーと一緒に、お菓子をつくりはじめた。

かまどのそばで、床にまな板をおいてのお料理。小麦粉をねる。水のほかにバターと砂糖がたっぷり重曹入り。大きなまな板いっぱい生地をひろげる。厚さは約五ミリ。短冊型に包丁で切る。包丁は中国のいわゆる菜刀。それぞれの短冊に、おなじ包丁ですこし切れ目をいれる。その切れ目に短冊の半分



夫婦で菓子づくり

をとおして、ねじり型にする。ヒツジの脂肪を鍋であたためる。脂肪をとかし、さらに加熱した脂に、短冊をおとす。揚げ菓子のできあがり。

気温は二十度にまであがっている。モンゴルはいわゆる大陸性気候で、夏と冬の気温差（年較差）も、昼と夜の気温差（日較差）も大きい。暑いと感じるほどの日に、揚げ菓子づくりとは、ますます暑い。明後日の準備をしているのだ、という。ウジチャは、小麦粉を練りながら説明する。

「あした、たてがみ切りなんだよ。旧暦の二月十日だろ。あれ、あしたじゃない。あさってか。まちがった。ハハ。たてがみ切りをするんだ。大勢の男たちがあつまるだろう。姉さん、もう見るものがたくさんあるよ、ほんと。バッチリ撮ってくださいねえ」

前日の準備のつもりが、前前日だった。ともかく、ウマのたてがみ切りだ。イベントだ。ウマをあずかる彼が、ホスト役となる。だから、接客のための菓子をつくるのであった。

ラクダやウマの場合、周辺の牧戸が所有するも

のをあつめて一つの群れをつくり、エキスパートが放牧にあたるというケースが多い。このあたりでは、ラクダはさほど多くない。ウマについては、三、二十四頭をそれぞれ所有する十五戸のウマがあつめられ、おおよそ二百頭の群れがつくられていた。放牧にあたるのは、ウルジーチンゲルである。人は彼を「アドーチン」すなわち「馬群の人」とよぶ。ウマ放牧のエキスパート、ウマ名人である。

馬群の場合、羊群のような日帰り放牧をしない。日帰り放牧のルートよりも遠方の牧地にはなたれ、自由に草をはんでいる。ウマ放牧のエキスパートは、ときおりそこへおもむき、馬群を水のみ場へとみちびく。秋は順調に肥えているかどうかをしらべ、春はだれのどのメスウマがどんな子ウマをうんだかを知る。所有者の要請に応じて、乗馬用の去勢ウマをひいてきたり、搾乳用の母ウマを子ウマとともにつれてきたりする。またときには、姿のみえないウマをさがして、遠く旅にでかけることもある。遠くにいる馬群と、一人遠くへいく馬人。そんな日常のなかにあつて、大勢の人びとがつどい、かつ馬群をまのあたりにする非日常、それがたてがみ切りの作業である。

日頃手元にあつて乗用するウマのたてがみは、つねに美しくかりこまれている。しかし、馬群のなかにいるウマの場合は、そのたてがみも尾ものびたまま。長い剛毛は一年に一度かりとられ、丈夫なロープ素材となる。たてがみ切りの作業は、通常初夏の吉日をえらんでおこなわれるという。ヒツジ・ヤギの出産シーズンをまえ、多忙な春に終止符をうつとき、人びとがつどい。またこのとき同時に、子ウマを去勢する。初夏の作業が春のいまおこなわれようとしているのには、わけがある。

ウマ名人のウルジーチンゲルが、ウマの放牧をやめるといふのだ。ウマの放牧をやめることがどうしてたてがみ切りの作業期日を早めるのか。そのあたりの事情について、ウジチャは小麦粉の生地を切り分けながら、説明する。

「馬人はだれよりも遠くへ行く。ウマに長時間乗るのはきついですよ。やってくるうちにわかつてくるのさ」



ウジチャ一家

かれはてれくさそうな笑みをうかべながらそう
いって、ひぎをさすった。どうやら、馬人のつら
さを一番よく知っているのは、ひぎの関節である
らしい。かれがやめるとなると、馬群はあらたに
別の牧民にたくすことになる。所有者たちのなか
には、あらたな馬人には委託しないと主張するも
のもある。結局、馬群は分割されることになった。
ウジチャは包丁をもつ手をやすめて、解説にちか
らをいれる。

「わかるんなら、できるだけ早いほうがよい。な
れしたしんだ牧地からウマをはなすのはむずかし
いんだ。なれしたしんだ群れからひきはなすのも
むずかしい。それでもあえてわかるんなら、いま
だよ、いましかない」

馬群を分割することの困難さについては、まだ
よく理解できない。ただ、馬群分割がのぞましく
ないこと、のぞましくないが実施されること、実
施にあたってはいまがいいこと、だからたてがみ
切りをいまおこなうこと、がわかった。そして、
馬群分割をすることになったそもその原因が、

ウジチャの馬人引退にあることもわかった。では、いったいなぜ、ウマをやめるのか。馬群管理は人びとの尊敬をあつめるカッコイイ仕事であるにもかかわらず。

ウマの群れを放牧管理することは、たしかにつらいかもしれない。馬人を十年もつとめてくれば、そろそろ大儀になるらしい。しかし、それだけではなさそうである。つらさを強調するウジチャの横から、妻のトヤーがいいそえる。

「うちは、これからラクダをふやすことにしたの」

いつのまにか、もう生地はすべて切り分けられていた。トヤーが短冊型の生地をひねる作業もおえているから、あとは揚げるだけ。かまどからはなれ、タンスにもたれて、ウジチャが話をつづける。

「これからは、ラクダだ、そうじゃあないですか」

馬人をやめて、これからラクダの放牧に力をいれるという。それにしても、ラクダの放牧はウマよりもむずかしいとされている。それで楽になるのだろうか。

「冬は簡単だね。夏のラクダがたいへんだ。脱毛の病気にかかりやすいからねえ。そうなれば価値がない。それに、夏は微風に向かってどんどんいってしまいうんだ、遠くへね、ラクダってのは。群れごとうしなうこともある」

そうなたら一大事。

「風をよめばいいんだよ。風が南からふいていれば、わがラクダたちは南へいってるにちがいない。風が西からなら、そっちへさがしにいけばいい」

ウマより簡単だとはとも思えない。弟のウニナーはわたしにラクダのほうがウマよりむずかしいといっていた。ウマ名人は、ウマよりむずかしいラクダに挑戦しようというのだ。

近年、ウマの価格は下降線をたどっている。いっぽうラクダは、その毛が商品価値をたかめている。

ウマの類別	所有牧戸															合計
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	
アズラガ(種オス)	1	1	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	7
モリ(去勢オス)	10	9	9	7	4	8	7	3	3	3	2	4	1	1	0	71
グー(成メス)	6	6	4	4	6	2	3	3	4	4	4	2	0	1	1	50
エル・シュドレン(2歳オス)	2	0	1	0	0	2	0	3	1	1	0	0	2	0	1	13
オヒン・シュドレン(2歳メス)	2	3	0	2	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	9
ダーガ(1歳)	3	4	3	2	3	1	2	3	2	1	3	2	0	1	1	31
計	24	23	18	16	15	13	12	12	10	10	10	8	4	3	3	181

①バータル(新馬人) ③ウルジーチンゲル(分家) ⑤ダンゼン(本家) ⑥ソヨルチンゲル(南家のチョルム家) ⑧リンチェンドルジ(南家) ⑩ジャンバルドルジ(東家)

表4：馬群頭数表（新馬人バータルのもとにのこった馬群）

ウマからラクダへという分家の選択には、商品経済にくみこまれた牧畜の経営方針がうかがわれた。すでに本家はヤギを選択し、ヒツジの群れにおけるヤギの比率をたかめている。ヤギの柔毛の市場価格は、ラクダの毛以上に上昇している。だから本家は、ヤギがふえると出産期の世話がよい厄介になることを覚悟しつつ、ヤギをふやしている。本家はヒツジからヤギへと転換した。分家はウマからラクダへと転換する。どちらも、商品経済の動向を反映している。しかしながら、こうした動向がどれほど安定したものであるかはだれも保証できない。とくに、ヤギが簡単にふえていく家畜であるのに対して、ラクダはそう容易には増殖しない家畜である。ラクダへの転換は、二十九歳の男の、一つの賭なのである。